

香取遺産

Vol.124

古墳時代武人の象徴

布野台3号古墳の甲冑

固生涯学習課

☎(50)1224



▲左上:短甲(後胴)、左中央:短甲(前胴)
左下:衝角付冑、右2点:頸甲・肩甲

布野台古墳群は、布野字台地先にある、黒部川による沖積平野を見下ろす台地上に立地しています。現在のところ、前方後円墳1基、円墳3基、計4基の古墳が確認されています。

3号墳は、全長約28m、高さ約2・5mの小型の前方後円墳です。昭和63年に確認調査を行った結果、前方部北側にある張り出し部から木棺直葬と思われる埋葬施設が検出され、衝角付冑・短甲・頸甲・肩甲・鉄剣・直刀・鉄矛・鉄鏃などの武器・武器が出土しました。

衝角付冑は、桃の実を半分に分ったような形で、後頭部や頬を防御するための鍔が取り付けられています。衝角とは、古い時期の軍船の船首下方に突き出した部分で、体当たりして敵船にダメージを与えるためのものです。冑の正面(真向)がこの衝角に似ていることから名付けられました。

短甲は、鉄板をはぎ合わせて革紐や鉄で留め、上半身の形に

合うように作ったもので、主に古墳時代前期から中期に用いられます。古墳時代後期になると、小さい鉄板(小札)を革紐で綴じた、桂甲と呼ばれる動きやすい甲が使われるようになります。

本古墳の短甲は、横長の鉄板を使用して鉄留めした横短板鉄留短甲という型式です。前胴(腹側)と後胴(背側)に分離していますが、本来は一体となっていたもので、右前胴に蝶番を付け、そこを開閉して装着したものです。

頸甲と肩甲は、首から胸と肩を防御するもので、左右一対がそろっています。これらの甲冑や武器類の様相などから、5世紀後半頃のものと考えられます。古墳から出土する甲冑は、全国的に見ると、甲または冑が単独で出土する例が大半です。本古墳のようにセットで出土するのは稀で、その意味では貴重な発見となりました。この甲冑は、

市文化財保存館(小見川支所2階)で展示しています。